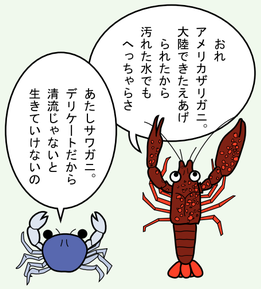
川にすむ生き物

川は大きく分けて上流域、中流域、下流域、河口に分類されます。それぞれ水流の速さや、水温、水の汚れぐあい、川底の様子などに違いがあり、それに応じて生き物もすみ分けをしているのです。川越市のあたりは、山間部から平地に出て流れもゆるやかになり、大きな曲線をえがいてだ行している中流域にあたります。

では、中流域にはどんな生き物がすんでいるのでしょうか。魚はコイ、オイカワ、モツゴなどがよく見つかります。

水生昆虫などは水質、つまり水の汚れぐあいによって、すんでいる種類が異なります。水の汚れは水中に栄養分が多くあるということでもあるので、水が少々汚れている中流や下流になると、生き物の種類もぐんと増え、顔ぶれも変わってきます。逆に言えば、どんな生き物がすんでいるかによって、水の汚れぐあいがわかるわけですね。さらに汚れが進んでドブ川のようになると、多くの生き物は生きていけなくなります。



▲「小畦川」と表記されることもあります。

▲江戸時代、川越と江戸を結ぶ舟路として栄え、新しい河岸が作られたことによる記念として、この名が付けられました。

▲中世、高麗郡本郡の中央に割り込んだところから入間郡といわれていました。『和名抄』に伊留末と書かれ、八郷に分かれていたといいます。その郡の中央を流れのが入間川でした。

川越市古谷、南古谷、上福岡市、富士見市などの水田の用水池として大切な沼です。▶

▲「九重」、「玖珠」とも書かれたことがあります。伊佐沼を出てすぐ、老人の腰のように折れ曲がって流れるので、つづらおり（葛折）の意味といわれています。

川へ行こうよ

持っていくもの

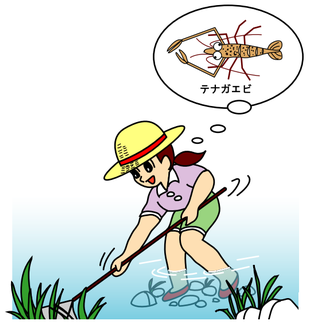
生き物のとらえ方

川幅が広いところで、水の流れのあまり速くないところをさがします。

まず石の下や水底をよくながめてみましょう。石をめくってみると、昆虫の幼虫やエビなどが見つかります。もし魚がいたら、石の下に両手を入れて、ゆっくりとせばめていきます。石の奥に追い込んで一気につかむのがコツだけど、ちょっと難しいかな。

タモあみは、水がくるぶしのあたりのところで、草や木のおおいかぶさったような岸辺で使ってみましょう。魚やゲンゴロウ、エビなどが入ってきます。

つかまえた魚やほかの生きものは、すぐに水そうに入れましょう。入れ物は日かげにおいてあげてください。



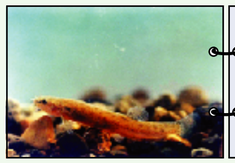
注意すること

- 川へ行くときは、ひとりで行ってはいけません。かならず大人といっしょに行きましょう。
- 晴れて、風の無い、午前中がおすすめです。天気予報に注意して、大雨のあとはさけましょう。
- 川へ裸足（はだし）で入ってはいけません。ビーチサンダルもすべって危険です。
- 川の中を歩くときは、すりあしで川底の安全を確認しながらしずかに移動しましょう。
- 下流にむかうときは、水の力でおされて倒れやすくなります。また、急な深みにも十分注意しましょう。

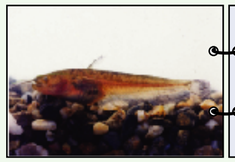
カマツカ
下を向いた小さな口は、水底にすむのに適応しています。えさをとるときは、口を砂につっこみ、昆虫の幼虫などを砂ごと吸い取り、砂はえらあなから吐き出します。コイの仲間で食用にもなります。

オイカワ
ヤマベとも呼ばれ、釣りの対象として人気の高い魚です。産卵期には、オスは体の色があざやかになります。なんでも食べますが、水辺の小さな昆虫や幼虫が大好物です。

ジュズカケハゼ
体は細長く、体に数本の黒っぽい横じまが見られます。産卵期にはオスが泥にトンネルを掘ります。そこにメスが卵を産みつけ、オスが守ります。



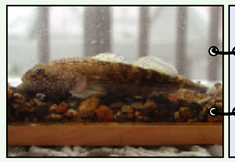
ホトケドジョウ
体長は６センチほどで、ドジョウの仲間としては短い方です。泳ぎ方も他のドジョウと違い、水の中層に静止し、ときどきゆっくり泳ぐ性質があります。水のきれいな水路などでよく見られます。



ナマズ
ナマズの「ナマ」はなめらかさを、「ズ」は頭を意味すると言われています。泥底が好きで、昼間はものかげにひそみ、夜になると小魚やエビなどをおそって食べます。

メダカ
体長４センチほどの小魚ですが、歌にもよまれて子供たちに親しまれてきました。田んぼや浅い池などにすみ、群れをなして水面近くを泳ぎます。体はメスの方がやや太めです（写真はメス）。

タモロコ
体長は１０センチで、体の側線に１本の帯があります。川底に近い場所を好み、水生昆虫、イトミミズ、水草、プランクトンなどなんでも食べます。



ヌマチチブ
頭が丸くて大きく体がずんぐりしていて、東京ではダボハゼと呼ばれています。産卵期のオスは体が真っ黒になり、首をふってよく鳴きます。メスは逆に白っぽくなります。

タイリクバラタナゴ
戦時中、長江から輸入された魚に混じって渡来し、利根川水系に爆発的に繁殖しました。ニッポンバラタナゴとの雑種も増えています。産卵期のオスはバラ色のあざやかな金属光沢を帯びています。

ウシガエル
体長20センチと日本にいるカエルの中ではきわだって大きい種類です。大正時代に食用として日本にやってきました。大声で牛のような鳴き声を出すのが特ちょうです。

シマヘビ
水辺や草原などにすみ、カエル、トカゲ、ネズミなどを食べます。小ヘビには茶かっ色の横しま模様がありますが、成長すると消えて、黒かっ色のたてしま模様が現れます。

ドブガイ
池や沼の泥の中にすむ二枚貝。からの長さは10センチを超えますが、からはうすくて強度はあまりありません。タナゴ類はドブガイに産卵するので、ドブガイの減少はタナゴの減少にもつながります。

スジエビ
体長５センチほどの小さなエビで、水中では触角（ヒゲ）の一部が白く光ります。雑食性で、川にも沼にもすみますが、汚れた水は好きではありません。

ミズカマキリ
体長は５センチほど。尾の先に伸びているのは呼吸管で、水草の多いところを好みます。姿やえさのとらえ方はカマキリに似ていますが、種としては大きく違います。欧米ではミズサソリと呼ばれています。

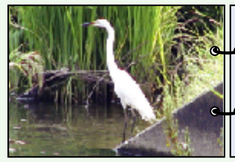
ハグロトンボ（ヤゴ）
幼虫はたいへん細長い体に長い触角とクモのような足をもち、おだやかな流れの中の藻などに止まって生活しています。成虫はオスの羽が黒いことから、この名が付きました。

ギンヤンマ（ヤゴ）
体長は４センチほどで、草のたくさん生えた池でよく見られます。成虫になるまでには、１０回以上も脱皮をくりかえし、５～９月の夜中に水から上がり成虫になります。

ミヤマサナエ
入間川や高麗川など、比較的環境のいい河川にすんでいます。羽化は６月頃で、その後は山地へ移動します。成熟するとまた戻ってきて、10月上旬頃まで繁殖活動をおこないます。

ジャコウアゲハ
羽が大きく、ゆったりした感じで飛びます。オスは独特のにおいを出すのでこの名が付きました。土手に生えているウマノスズクサに卵を産むので、よく水辺で見られます。

カワウ
先の曲がった長いくちばしと長い首を持つ大きな鳥で、たくみに潜水して魚を捕らえます。かつては湖沼に数多く生息していましたが、近年、開発によって繁殖地が少なくなってきています。



ダイサギ
全身白色で、シラサギの仲間ではもっとも大きな鳥です。水田や浅い湖沼などで生活し、水の中をゆっくり歩いてカエルやザリガニをとったり、立ち止まって近づいた魚をすばやくくわえたりします。